蟬に寄せる叙情

竹原崇雄

一

漂泊の叙情詩人三好達治は、蟬を次のようにうたっている。

……（略）……今年五月十日、私は初めて、私の住む草舎の前の松林に、ひと声蟬の鳴き出る声を聞いた。折から空いちめんの薄雲が破れて、初夏といふにはまだ早い暮春の陽ざしが、こぼれるやうに斜めに林に落ちてきた。私はそれに気をとられて読んでゐた本を机の上に置かうとしてうなじを上げた。その時であった、天上の重い扉が軋るやうに、ぎいいとひと声、参差（しんし）として松の梢の入組んだとある方に、珍しや、ただひと声あの懐しい声を風の間に放つものがあった。

蟬！新しい季節の扉を押し開く者！

……（略）……

蟬が鳴いている。蟬はその後ひきつづいて毎日鳴いている。そして今日は六月朔日である。私は今日外から帰ってきて、松林の丘を登りながら、その小径の踏段の一つに、まっ黒に集った数百匹の蟻によって運ばれている、小さな蟬の遺骸（なきがら）を見た。羽の透明な、小指の頭ほどの蟬である。五月十日から今日まで、仮りにその小さな昆虫の命を三週間ばかりのものとするなら、私は既にその幾倍の時間をこの地上に生きてきただろう、……略……（「日本の詩歌」三好達治、中央公論社）

夏という「新しい季節」の到来を告げるものとして、三好達治は、なつかしく、そしてやさしく、蟬をうたいあげる。と同時に、はかないその命を限りなくいとおしんでいる。はかない命であるからこそ、「懐しい」思いは一段とつのってくるのであったろう。「祖母」についての蟬につわる思い出も、結局は、この「可憐」ではかない生の呼びかけが惹き起すものであったに相違ない。蟬の声は、夏の季節の象徴であり、小さな体で、生命限りに鳴く声は、生きている者の必然的に辿らねばならぬ寂滅の世界を暗示させるものでもあった。訪れる季節の爽やかさと、去りゆく季節と共に滅びゆかねばならぬ生命の寂しさとを蟬の声

は表現しているのであった。だからこそ、蟬は時を惜しんで、むさぼるごとく生きなければならぬものであった。にもかかわらず、初夏の蟬は、「控え目に、おづおづと」鳴いている。詩人の心は、その時、自らの生命のあり方に触れて愕然とするのである。

二

詩人ならずとも、蟬は夏の季節を彩るものとして、多くの人々に愛されてきた。そして、その長い地下の幼虫の生活に比して、地上でのはかない生命を人々は惜しんだ。しかし、このような蟬に寄せる叙情は、果して、近代の人のみでなく、古代の人々も共有し得た叙情であったろうか。

「徒然草」におけるあの有名な一段の中で、兼好法師は次のように、蟬に寄せてその感懐を述べている。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろうの夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待（ち）えて何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

（第七段）（日本古典文学大系）

ここでは、明らかに蟬の命をはかないものとしてとらえている。漢籍より得た知識を基盤とした上での表現であったのかもしれないが、蟬は夏のものであり、「夏のせみ」は夏の季節のみしか知らぬものとして、その短い生をいとおしみつゝ、人の生き方への批判を投げかけているのである。この限りにおいて、兼好は蟬の生命のはかなさを知っていたということになるであろう。しかし、それも確実ではない。「蜉蝣朝生而暮死」「蟪蛄不知春秋」という「淮南子」「荘子」にその発想の源を探ることができるからである。観念的な知識としては知っていたかもしれないが、蟬そのものの具体的な相として理解していたかどうかはやはり疑点として残るのである。

三

古典の中に描かれる蟬について、考えてみたい。

「倭名類聚抄」（巻十九）においては、次のように記されている。

蚱蟬　本草云蚱蟬作禪二音和名奈波世美　雌蟬不能鳴者也

馬蜩　爾雅注云馬蜩一名蛹音綿和名無末世美　蟬中最大者也

寒蜩　兼名苑云寒蟬一名寒蜨音一名蟪音鷹俗云加無世美

蛁蟟　陶隱居本草注云蛁蟟凋遼二音字亦虭蟧和名久豆久豆保宇之　八月鳴者也

芋蜩　爾雅注云芋蜩和名比久良之　小青蟬也

以上によってみれば、平安時代においては、「奈波世美（ナハセミ）、「無末世美」（ムマセミ）、「加無世美」（カムセミ）、「久豆久豆保宇之」（クックツホウシ）、

「比久良之」（ヒクラシ）という五種の蟬の名が確認されていたことになる。しかし、これらの蟬が、どのような生態（幼虫期、成虫期）を持っているかについての記述はない。「奈波世美」については、「蜻蛉日記」(下)にその名が見えている。

かくて、つれづれと六月になしつ。ひんがしおもての朝日のけ、いとくるしければ、南の廂にいでたるに、つゝましき人のけぢかくおぼゆれば、やをらかたはらふしてきけば、蟬のこゑいとしげうなりにたるを、おぼつかなうて、まだ耳をやしなはぬ翁ありけり。庭はくとて、箒をもちて、木の下にたてるほどに、にはかにいちはやうなきたれば、おどろきて、ふりあふぎていふやう。「よひぞよひぞといふなはせみ、きにけるは。蟲だに時節をしりたるよ」とひとりごつにあはせて、しかしかとなきみちたるに、おかしうもあはれにもありけん、こゝちぞあぢきなかりける。

（「日本古典文学大系」）

道綱母が、夫兼家の長いとだえに今はもう恨み言を並べる気力もなく、半ば諦めの空しい気持の中で蟬の声を聞いている。「蟲だに時節をしりたるよ」とつぶやく翁の言葉に応えるかのように、蟬が「しかしか」と鳴く。「つれづれと六月になしつ」という状態の中での「時節」を弁えた夏の蟬の声は、道綱母にとって耐え難い程の響きとなってうつうつとした心に喰い入っていったに違いない。

ここでの「なはせみ」について、柿本奨氏は、底本とした書陵部蔵本の「よひそよひそといふなはせみ」の「なはせみ」は、「なるせみ」の誤写であるとして、「その鳴き声が、今はよきわが世ぞ、の意に聞えると言い伝えられていることを表わす。」と解しておられる。(注1) その理由として「なはせみ」は「本草和名」「和名抄」にあたりに「雌蟬不能鳴者」として説明されてあるものを引いておられる。「蟬の汎称のようにも見えるが、さりとも汎称ともきめがたい。」として、結局、「いふなるせみ」の誤としておられるのである。ともあれ、「時節をしりたる蟬」が「しかしか」と鳴く声を道綱母は聞いて「あじきなかりけり」と嘆ずる反応しかその心にはできない状態にあったのであろう。せめて言えば、夫兼家の時を忘れたかのような無音を恨む心で、蟬の鳴き声を耳にして、それが「時節」と密接に結びついたものであるだけに、道綱母は、その身からにじみ出る「あじきな」き叙情を触発させられていると言い得るのである。しかし、道綱母がその日記に「あるかなきかの心地する」と記し、それが「かげろふ」の如く「ものはかなき」「身の上」を述懐したものであるとすれば、その蟬を耳にしても、「声いとしげう」「いちはやう」というとらえ方しかしていないというのはやや疑問に思えてくる。「あじきな」き感情を抱く程兼家との関係がはかないものであれば、当然そこには蟬の声に即して起る「蟬のようにはかない身」との連想が働いてもしかるべきだと思われる。ここにそのような感情の起伏がないのはなぜか、この点はやはり疑問としなければならない。

（註1）「蜻蛉日記全注釈下巻」87頁

四

「蜻蛉日記」(下)より今一つ引用してみる。

さながら八月になりぬ。ついたちの日、雨ふりくらす。時雨だちたるに、末の時ばかりに晴れて、くつくつぼうしいてかしがましきまでなくをきくにも、「我だにものは」といはる。いかなるにかあらん、あやしうも心細う、涙うかぶ日なり。

「久豆久豆保宇之」(「和名抄」)が、ここでは、道綱母の悲しみに涙を添えるものとなっている。しかし、この「くつくつぼうし」と道綱母の心情とのかかわり方は、その鳴き声が悲しいとか、鳴いていても蟬の命はやがて絶えるのだとかいったものではなく、蟬は元気よく声を出しているが、自分の方は声も出せないという逆の形で蟬はとらえられているという点に留意すべきであろう。

右の引用文中にある「我だにものは」については先覚の説が多い。「宇津保物語」に彈正官忠康の歌として見える「かしがまし草葉にかかる虫のねよ我だに物はいはでこそ思へ」(「藤原の君」)を引歌としているのか、それとも、当時人口に膾炙していた古歌があったのか、判断はつけ難い。「新撰朗詠集」上(虫)に於ては、「かしがまし野もせにすだく虫のねやわれだに物を言はでこそ思へ」(類従本)となっている。この二つの歌のみを比較したところでは、「草葉にかかる虫のね」「野もせにすだく虫のね」となっていて、そのままでは、この「虫」は蟬とは認め難い。「草葉」の中、「野」の中で「すだく虫」としてしか理解できないものではなかろうか。もっとも、蟬のことを「虫」として表現してある例も見られる。「和漢朗詠集」巻上夏、蟬

これを見よ人もとがめぬ恋すとてねをなく虫のなれるすがたを　　重光大納言

ここに表現されている「虫」については、「蟬」というその題からも、また、後撰和歌集、巻三にある「物いひける女にせみのもぬけをつゝみてつかはすとて」とある詞書によっても理解できるように、「蟬」であることは明らかである。かといって、前出の「草葉」「野」とのつながりの中での「虫」は、やはり「蟬」とは解し難く思えるのである。とすれば、やはり、「宇津保」に依ったものではなく、当時人口に膾炙していた古歌をそのまゝ借用してきて「くつくつぼうし」と結びつけたものであったと解することもできよう。それはともかく、その結びつけ方において「蜻蛉」の「くつくつぼうし」と「かしがまし――虫のねよ我だに物はいはでこそ思へ」という歌との関係は、「宇津保」の彈正官の場合と同様に、「かしがましきまで」(「蜻蛉」)「声高く」(「宇津保」)という点で、共通しており、歌意としては、蟬のようには、自分はとても口に出して思いを述べることはできない、この深い思いを汲みとってもらいたいという意味になるであろう。従って、蟬の声は「かしがまし」という表現の中で承けられているということになるのである。「蜻蛉」での二つの引例は、蟬は夏の季節に鳴き、その鳴き声は喧ましきものであると

いうようにとらえられているということを示し、「寂しさ」「はかなさ」といった否定的な生の姿にはつながっていないのである。

五

ここで、「宇津保」の場合を検討してみよう。

三のみこ、御まへちかきまつのきに、せみのこゑたかくなくおりに、かくきこえ給。

かしがまし草葉にかかるむしのねよわれだに物はいはでこそおもへ

すみどころある物だに、かくこそ有けれ、

右の引用文中注意しなければならぬ表現は、蟬について「すみどころある物」というとらえ方をしている点である。「すみ」とは「棲み」であり、一定の生活の場、即ち、ねぐらを持っているという意味である。「すみどころ」を持っている蟬でさえこのように「こゑたかく」ないている。「すみどころ」を持たぬこの私の嘆きがいかばかりか、推察くださいという意味であろう。

ここで、蟬が「す」を持つとはいったいどういう意味なのか。しかも、この蟬が、「すむ」という語に結びつくのは、すべて秋の蟬に限定されているということである。同じ「宇津保」に次のような例がある。

秋をへてこよひのことは松がえにすごもるせみもしらべてぞなく（「吹上（下）」）

「宇津保」の主人公仲忠と吹上に住んでいた源涼とが「神泉」の「もみぢの賀」において琴の弾きくらべをした際の帝の歌である。この中に詠み込まれている「せみ」は「秋をへて」とあることによってもわかるように「秋」の末に「なく」「せみ」であることははっきりしている。

秋ふかみ山べにかるゝ松風をめづらしげなくせみやきくらむ

右の「秋ふかみ」の歌は、さきの「秋をへて」の歌の次に位置している仲忠の歌である。「秋ふかみ」とあることによってもわかるとおり、季節は秋の末である。この歌の場合は、鳴いている蟬ではなく「きく」「せみ」であるという点が前の歌とは異っている。

「秋をへて」の歌で特に注意すべきは、「松がえにすごもるせみ」という表現である。この「せみ」は、今を盛りと鳴く蟬ではなく、「秋をへて」自らの「す」に「こも」った「せみ」ということになる。

夏の終りとともに、その生涯を果てるという現在の知識よりすれば、奇異としか思われぬ表現であるが、当時の人々の考えとしては、鶯やその他の鳥などと同様に、「せみ」も「す」を持ち、秋の訪れとともに「こもる」ものとしていたに相違ない。「秋をへて」の歌意も、蟬は一般に秋の末などに鳴くものではないが、この仲忠の素晴らしい琴の音色を耳にしては、たとえ「すごもるせみ」であっても鳴かずにはおられまい、ということであろう。「秋ふかみ」の方も、「すごもるせみ」が、松風の音とともにひびく琴の音を「きく」と詠んでいるのである。鳴くのではなくて「きく」というところに「秋をへて」「すごもるせみ」の

姿が逆にうかびあがってくると言えるのである。

松風のこゑにくらぶることのねをすなるゝせみはしらべざらめや（「春日詣」）

春山の木のねのせみはすをせばみ夏のこのはや恋しかるらん（「春日詣」）

右二首の歌は、「宇津保物語」の「春日詣」の巻に出る歌である。ここでの「せみ」は「す」に結びついていて「春」のものとなっているが、これは「秋」に巣ごもりして「冬」「春」を経過して「夏」を待つ「せみ」であって、さきに論じた「せみ」と性格は異なるものではない。

これによってみれば、当時の人々は、蟬の命ははかないものだなどとは考えていなかったに相違ない。蟬の季節は夏であっても、その己れの季節が秋を経て過ぎ去っていくと、蟬は巣にこもって、再び訪れてくる己れの夏の季節を待つのだと考えていたのである。

道綱母が、「なげきつつ」その「世」を「はかなく」生きながら、蟬の声を聞いても、蟬は夏という「時節」を弁えて訪れてきたが、夫兼家は「時節」を弁えず待てども訪れては来てくれない、という点でその叙情を触発させるのみで、蟬の命のはかなさと、我が身のはかなさとを結びつけて嘆くことをしていない。それは、「宇津保」の作者と同様に、蟬は「すむ」という知識を持っていたからではなかろうか。蟬そのものは、はかない命の発想の原点とは、以上のような意味でなり得ないのである。蟬を虫としてとらえた場合、それは露と結びついて、はかない命を比喩するものとはなり得ているが、蟬そのものの特殊性に由来するものではなかったのである。従って、「空蟬」という語のもつ「はかない」感じは、「現身」の「はかなさ」から導かれて来たものであり、また、「空蟬の身をかへてける木の下に猶人からのなつかしきかな」という「源氏物語」の巻名の由来のように、蟬の脱け殻の実体のないもののもつ「はかなさ」から来たものであって、蟬そのものの命のはかなさに基づくものではなかったと考えることが出来よう。平安時代の人は蟬の声を聞いても、その命のはかなさに思いをはせることはなかったのである。「源氏物語」の「常夏」の巻に一例出てくる蟬も、夏の暑さを表現しているのみである。万葉の「日倉足」の声も「瀧もとどろに」であって、「蜻蛉」の「かしがまし」に通うものである。芭蕉の蟬はどうであろうか。芭蕉は蟬の生命を知っていたのであろうか。あの「閑かさや」という詠嘆の底には、生死を超えた永遠に連なる寂とした世界があるように思えてくる。芭蕉にとって、生死は問題ではなかった。人間と自然とが融合する境地の中にあって、芭蕉の芸術はその成立の瞬間において永遠を志向しているのである。

（本学助教授）